

masatsugu ono

祈りの前年

小野正嗣



九年前の祈り

小野正嗣

講談社

小野正嗣 (おの・まさつぐ)

1970年生。大分県出身。東京大学教養学部卒業。同大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程単位取得退学。パリ第8大学Ph.D。2001年、「水に埋もれる墓」で第12回朝日新人文文学賞受賞。'02年、「にぎやかな湾に背負われた船」で第15回三島由紀夫賞受賞。その他の著作に『森のはずれで』『マイクロバス』『線路と川と母のまじわるところ』『浦からマグノリアの庭へ』『夜よりも大きい』『獅子渡り鼻』など。現在、立教大学文学部文学科文芸思想専修准教授。

きゅうねんまえ
九年前の祈り

二〇一四年十二月十五日 第一刷発行
二〇一五年一月二三日 第三刷発行

著者 — 小野正嗣
おの まさつぐ

© Masatsugu Ono 2014, Printed in Japan

発行者 — 鈴木 哲

発行所 — 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一―二―八〇〇―一

電話

出版部 〇三―五三九五―三五〇四

販売部 〇三―五三九五―三六二二

業務部 〇三―五三九五―三六一五



印刷所 — 凸版印刷株式会社

製本所 — 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは群像出版部宛にお願いいたします。

目次

九年前の祈り

9

ウミガメの夜

115

お見舞い

149

悪の花

199

九年前の祈り

小野正嗣

講談社

兄、
史敬に

装画
装帧

水野健一郎
Gaspard Lenski

目次

九年前の祈り

9

ウミガメの夜

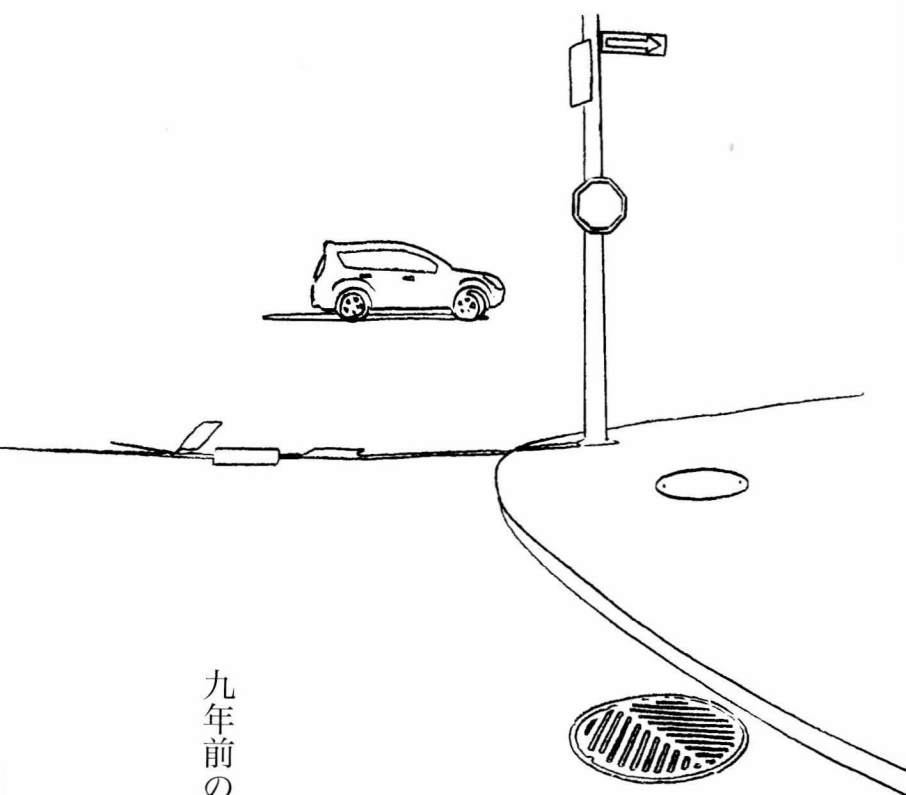
115

お見舞い

149

悪の花

199



九年前の祈り

渡辺ミツさんのところの息子さんが病氣らしい。母がそう言うのが聞こえたとき、さつきから喋り続ける母を無視して携帯の画面を見るともなく眺めていた安藤さなえを包んだのは、柔らかな雨のような懐かしさだった。

「みっちゃん姉！」とさなえはささやいた。

病氣という不穏な言葉にもかかわらず、そしていま彼女が置かれた見通しの決してよいとは言えない展望にもかかわらず、急に雲間から一筋の光が差し、「渡辺ミツ」という名がさなえを照らした。

その優しい光のなかに、ひざまずいて祈る一人の初老の女性の姿が見えた。赤いリュックを背負った小柄なおばちゃん、みっちゃん姉が頭を垂れ、握り合わせた拳の上に額を乗せていた。いつまで祈るつもりなのだろう。なかなか起き上がろうとしない。そこは教会のなかだった。モントリオールの教会。ステンドグラスを通して落ちてくる、えも言われぬ色合いの流体

のような不思議な光で満たされていた。みっちゃん姉のことを思うと、さなえがかつてこの郷里の町に住んでいたころに行ったカナダ旅行の記憶へと連れ戻される。浮かび上がったみっちゃん姉の姿は、しかし母の声によつて破られた。

「息子さんは相当悪いらしいわ……」

そしてひとつ大きくため息をついてから母は続けた。

「あんたがこげなことになったもんじゃから、みっちゃん姉に顔を合わせにくうなった」

さなえは黙っていた。こんな保守的な片田舎でもひとり親家庭はもはやそんなに珍しいことではないはずだ。さなえの中学校の同級生のなかには四人も離婚経験者がいると、訊かれもしないのに呆れたように嘆息したのは母だった。一学年一クラスで十九人しかおらず未婚の者もいることを思えば、かなりの数だ。帰省してすぐ、高校のクラス会の案内が来ていると葉書を母に渡された。行けば、さなえのようなシングルマザーも何人かいたのかもしれない。しかしそんな気にはなれなかった。どうせ暇なんじゃから、と母は暗に非難した。父は何も言わなかったが、母と同じ考えなのはわかった。

今年三十五になるさなえは、半年ほど前に息子の希敏^{けびん}を連れて東京からこの海辺の小さな集落に戻ってきた。七年も帰省していなかったことになる。希敏の父となる男——この土地の言い方を真似ればガイコツ人、つまり外国の人で、カナダ人だった——と東京で同棲するように

なつたとき、世間体を気にする両親はいい顔をしなかった。母はしょっちゅう電話をかけてきた。同棲を始めて最初の一年くらいは電話での一言目と最後の言葉はつねに「いつ式を挙げるのか？ 品が悪い」だった。あんパンの皮だけ食べるような会話だった。一言目と最後の言葉だけが大切であつて、あんこの部分、中身の会話は母にとつては無意味だった。同棲相手のフレリックと母は電話で話そうとしなかった。フレリックが喋りたがっていると言うと、母はそういうときだけさなえに対して心から感心したように言つた。「おまえとちがうて英語はわからんから」

そんな娘を育て上げた自分に対する礼讃だったかもしれない。だからさなえはフレリックが、さなえの英語以上に日本語を理解していることは黙つていた。母が彼と話そうとしないことが結果的には幸いした。希敏が一歳の誕生日を過ぎたあたりからフレリックはもう家に居らなくなつていたからだ。

希敏はフレリックと暮らすようになって三年が過ぎてようやくできた子だった。希敏が生まれる前、電話をかけてきた母はひどく深刻な声で、「もしかして、おまえ、犬を飼っているのか？」と訊いてきた。またか、と腹が立つた。ソファの上に放つた携帯電話からはスピーカーにしていなくてもかわらず、母の声が聞こえてきた。「犬を飼つておつたら、情が全部その犬に移つて子供がでんことなる」